

# 奈良時代

- ① 元正天皇の養老行幸。元正天皇の時代に、養老に源亟内といふ子がゐて、貧しい中にも父に酒を進めて楽しんでゐた。孝心に通じてか、瀧の水が酒に變つた云ふことが天皇に達した。天皇は大變感心遊ばしめてここに一行幸、此地を養老と名付け、年號を養老とお改めになつた。此処にある養老寺は、源亟内が後に出家して開いた寺だといふことである。
- ② 濃飛の國分寺。聖武天皇は、佛教の力で國を治めやうと思召して、諸國に國分寺を建てさせなされた。美濃の國分寺は不破郡の青墓村の今の國分寺の南にあつた。今そこに數個の礎石が残つてゐる。
- ③ 行基と美濃。行基は布教のかたはら公益を廣めて、美濃國にも来た。此の近くで關係のあるところは長良の護国寺、芥見の願成寺、島の阿願寺、鏡島の乙津寺等である。就中乙津寺が有名である。
- ④ 日野の金王丸。聖武天皇は、佛徳によつて國を治めんと思召し、奈良の大佛造營に當つて、行基に命じて諸國の有名な造佛師を探させなされた。行基は日野に金王丸のあること

⑤ 岩瀧の毘

を知って、天皇に申し上げた。御召により、都に上った。金丸は、苦心の末目出たく大任を果した。都に上った。天皇から賜った佛鉢は、国宝となつて今も長良の雄総寺に保存されてゐる。沙門天(国宝) 岩瀧の編笠山の毘沙門天は天平十年に行基菩薩がお作りになつたものだ。傳へらる。天皇の命により毘沙門天を関東にお祀りしようとした。者は、途中岩瀧の豪族の家で一泊した。翌朝此の毘沙門天を背負はうとしたところが一泊した。翌朝此の毘沙門天に重くなつて、どうしたところが一泊した。翌朝此の毘沙門天に安置せよとの佛の思召しに相違ない、と云ふので、此所にお堂を建ててお祀りしたと云ふことである。

# 平安時代

① 飛驒の匠

大化の新政の時、山國である飛驒の為に庸調をお許しになり、巧な大工を都に上らせて仕事をさせなかつた。是等の者を飛驒の匠と云つて、奈良京、平安京の御造營にも奉仕した。中には、その技術が優れ、檜前杉光の如く五位の位を賜つた者や、當時第一の書家と云はれた百

② 伊福部と  
済河成と技くらべをした者もある。  
殷富門平安遷都の命が下ると、諸國の豪族は競つて御

③ 最澄と美  
造營に奉仕した。此の時、伊吹山の東にゐた豪族の出来上  
氏は、平安京の一門を作ることを許され、立派に  
ると、畏くも伊福部と命名遊ばされたが、後、殷富門と  
文字をお改めになつた。

④ 空海と美  
濃。さしかかつた。此の坂は険しい。その曲りも曲があつ  
て。一日の行程はその半にすぎない。最澄は、上泊る家がな  
くて、旅人は大變困難をしてゐた。旅人の便利を計つた。  
寺と旅舎とを兼ねた堂を建てて、旅人の便利を計つた。  
又伊吹山には唐から持歸つた薬草を植ゑた。美濃の平野  
には最澄に關係のある処が多くなる。天臺宗の野

⑤ 菅原兼茂  
濃。空海も美濃國にきて、種々世の為に畫したが、その  
中近く有名なものには、須衛（各務村）の開いた鏡島の乙法  
を教へたと、先に行基が勅命を受け、鏡島の海中の  
津寺を大きく改築した。大師が佛に念じて鏡島を海中に  
一小島であつたが、大師が佛に念じて鏡島を海中に  
と、忽ち潮が引いて陸地になつたので鏡島と云ふ様になる  
つたと云ふことである。陸地になつたので鏡島と云ふ様になる  
菅原道真が吸収に遷された時、其の子共達も方々に流

⑥ 那珂郷と

⑦ 美濃源氏

⑧ 土岐氏

された。三男の兼茂は飛驒権掾に遷されて高山にゐたが、父の死を聞いて、悲しんで祀つたのが、高山市にある天満森である。菅公を祀つた天満神社は、日本全国所々に多い。加納の縣社天満神社は、斉藤利永が加納城を築いた時祀つたのである。醍醐天皇は藤原時平に命じて延喜式を編纂し、その中に美濃の神社が三十九社あり、此の頃別に神帳を作らせなかつたが、其の中に雄社を記して、各牟郡五位下眞幣明神とある。又、次は朱雀天皇の御代に、源順の著した和名類抄と云ふ本には、那珂郷と云つて、主帳と云ふ役人を一人おいて治めたとも書いてある。

京では藤原氏が栄えて、他姓のものもあつた。なつかしき下り、なつかしき領を、得る様になつた。清和天皇の御時、國を占領して、勢を得る様に任せた。清和天皇の御時、國を占領して、勢を得る様に任せた。清和天皇の御時、國を占領して、勢を得る様に任せた。

つた。其の一族には、多治見國長、土岐頼兼等忠義な武士も少なくなない。

軍に文治の頃、頼朝に仕へ、其の子孫の變に官久は、土岐に住んで、土岐氏を稱し、尊氏の部下となつて功を

⑨ 崇徳天皇

立てたので、初代の美濃守護となつた。それから代々守護職を務め、十一代頼藝の時になつて、勢が衰へ、斉藤道三に攻められて山縣郡の大桑に退くまで、二百年余り足利幕府の重臣であるとともに、美濃勢の中心であつた。後天文二十一年に、再び斎藤道三に居城大桑城を攻められて、一族と共に甲斐の武田信玄の所へ逃げ、茲に美濃の土岐氏は全く滅びてしまつた。

⑩ 青墓と源

崇徳天皇と金比羅神社保元の亂に、畏くも崇徳上皇は讃岐に移され給うた。崩御の後讃岐の人達は、大國主尊をお祀りした金比羅神社に相殿を設けて、上皇の御霊をお祀りした。西市場の無格社金比羅神社にも上皇を合祀してある。氏の外、平治の亂に破れた源義朝は、義平・朝長の二子の外、数名の重臣と共に、不破郡青墓村の長者大炊（父為義の妻の姉）を訪ね、此処で、義平には飛驒で、朝長には信州で挙兵を命じたが、朝長は京都で受けた傷が重くなり、再び立つことが出来なくなつたので、父に首をはねてもらつた。義朝は迫る追手を虞れ、終わりの野間にゐる舊臣長田忠致にたよつたが、忠致は、其の後頼朝に磔びて之を斬つた。主人を斬つた忠致は、其の後頼朝に磔にされた。義平は早速飛驒に入り兵を集めたが、義朝の死を知つたので兵は次第に少なくなつて、又元の一人になつてしまつた。義平は「犬死にせんよりは清盛父子の一人でも」



③ 承久木曾

川の合戦 承久三年四月、後鳥羽上皇から北条義時討伐の命が下つた。其の知らせが鎌倉に傳はると、義時は泰時を総大将として、東海・北陸・東山の三道から大軍を京都に向かはせ、た。京雲霞のよな賊軍に破れて京都に引き上げた。此の時美濃源氏の一族は官軍に應じて奮戦した。政北条泰時は、暴虐な父の命で承久の變には官軍に向かつたが大元來公平無私のため、はれみ深い人で、執権になつたから大いに民政にまつとめ、貞永間の飢饉には、西濃地方千余町歩の税を許し、又美濃の赤坂に役人をおいて、親類を尋ねて流浪する者に旅費を與え、行先のない者を止まらせて、百姓を助けさせた。人の祈願あり、元寇の國難には、後宇多、天皇の南宮神社への勅願があり、美濃の人は此の神社に、飛驒の南宮神社への

④ 泰時の民

渡つて奮戦したが遂に斬られ、部下も多く戦死してしまつた。墨俣に義圓の墓がある。行家も次いで破られ、東小熊に退いて陣どつたが、此処も遂に支へきれなくなつた。折津、熱田、矢作川へと退陣した。此処で行家は、「東軍大挙す」と老兵を百姓姿にかへて宣傳させた。之を聞いた平氏は、驚き恐れて退却しはじめたので、行家は追撃して功をたてた。斬られ、其の末路は哀れであつた。頼朝にとらへられて斬られ、其の末路は哀れであつた。

⑤ 元寇濃飛

元寇の國難には、後宇多、天皇の南宮神社への勅願があり、美濃の人は此の神社に、飛驒の南宮神社への

# 建武中興時代

⑥ 美濃の刀工社に梵鐘を奉納して、敵國降伏の祈願をした。  
 崎正宗といふ高刀工が、京都に粟田吉光、鎌倉に岡

⑦ 加藤景延と美濃焼瀬戸焼を創めた加藤景正の子孫の景延は、父  
 ある。た。最近有名になつて来た関の刃物の起源は此処に

⑧ 願成寺の仁王彫刻師、運慶の作品であるといふ傳へられてゐる。  
 ない。正親町天皇、後陽成天皇は、景延の御覧に  
 志し、苦心の末大成して、後世に傳はる美濃焼の基を開  
 の代から土岐郡泉村に住んでゐた。彼は製陶法の改良を

① 正中の變と美濃源氏 元弘の亂の数年前に正中の變といふのがあ



③  
顯家  
青野

つかたにをい（大口年関ヶの光氏義 ま  
てらか向聞に細い貞正東原薄義にの又し  
戦吉顯かい之畑に満月のの墨は攻根、た  
死野家はたをふがに結戦の出め尾延。  
しへはせ尊破土る千美城 桜家はしれに四  
た上一た氏つ岐ひ余濃宗延はしてて来年  
。ら戦。はた頼威騎の廣元根てて城て、  
うも両大。遠風を青と二年氏尾が、越  
と交軍い頼を堂率野共年に陸の墓標北た皇破  
しへはに遠初々ゐヶに奥の標北た軍れた  
たな関驚はめ工て原五十の北島顯とめにた  
。いのき傷美と之に着萬の島顯と。し、め貞  
しで藤、を濃二に向加いの大軍家は。て義たの  
か陣川高負の向かはつたたの。引、ゐたは、義  
しをに師つ賊かはうたとの。此ゐて良。吉遂助  
撰拂對泰て軍が追と。の。親 有野には、  
津ひ陣に長森追と。の。親 有野には、  
の、し大軍城撃しで此ゐて良。吉遂助  
石道た軍をにした、の。親 有野には、  
津をがを退た時官時西親 有野には、  
で變、與いの、軍根上王 有名に賊、  
賊へ何をてたで長の尾しを な走り軍根  
と伊考顯。、森士の、奉 根り土尾  
戦勢へ家之大城気堀三じ 尾、岐光

# 室町時代

① 義視と革手城 土岐成頼は應仁の亂が起ると、美濃勢八千騎を率

② 前の齊藤 卿が多、その間に、焼野原となつた。義視は十一年間に居

つた。その間に、焼野原となつた。義視は十一年間に居  
に伴つて来て、大いに優遇した。義視は十一年間に居  
前後十一年の大亂の後、成頼は義視、義植父子を革手城  
みて山名宗全に味方して、其の一大勢力となつて戦つた。  
氏承久二年に、院の北面の武士藤原景頼は、齊藤と名  
乗つて美濃の國司代理に任せられ、承久の亂には官軍に  
應じてゝ居、鵜沼の渡を守つて破れたが、其の子孫は代々各  
務郡に居住してゐた。其の父は、其の子孫は代々各  
土岐氏の勢が盛んなるのを見て、之に仕へた。齊藤利永  
は、守護の士が盛んなるのを見て、之に仕へた。齊藤利永  
神社を守護の士が盛んなるのを見て、之に仕へた。齊藤利永  
神佛を尊んだ。とて祀り、又岩戸に観音を祀りなどして  
守つて益々勢力は成頼の應仁の亂に出陣中は、良く留守を  
窮迫も甚し。かつたので、錢三十貫を奉る等皇事につとめ、  
文を好みて、一条兼良等の学者と交わつた。主家土岐氏の  
菩提所とし、て岐阜に瑞龍寺を建てた。

③ 少林寺

つたがなかつた。新九郎は齊藤利政と姓名を改めた。藤を継が  
つたがなかつた。新九郎は齊藤利政と長井新九郎にたつた。勢力であ  
つたがなかつた。新九郎は齊藤利政と長井新九郎にたつた。勢力であ  
つたがなかつた。新九郎は齊藤利政と長井新九郎にたつた。勢力であ

石（國師）新加納の少林寺は室町時代の名僧礎石（夢窓礎  
村）にあつた。その後、土御門天皇の御代に、薄田司濃  
と云ふ人が、東陽和尚を迎へて、今の地へ移した。織田信  
長が稲葉城を攻め、兵火に焼かれて荒れた。玄蕃が、正  
保二年に寛永年間、和尚を迎へ、地に封せられた。坪内家累代の菩提寺  
とされた。體道和尚を、此の地に再興して、坪内家累代の菩提寺  
鶴沼の大安寺、岐阜の瑞龍寺及び大宝寺、長良の崇福寺、  
市橋の立政寺、日蓮宗では岐阜の梶川町の常在寺である。

④ 一条兼良

室町時代の学者一条兼良は、京都の亂をさけて奈良に  
ゐたが、文明五年に長子を訪ねて鏡島の長寧院に來た。  
此の時、革手城にゐた齊藤妙椿に優遇され、岐阜付近で歌  
を詠んで、程なく奈良に歸つた。  
氏の武士で、頼藝によつて齊藤氏を継いだ。長井新九郎も、北  
後の齊藤

④ 後の齊藤

面  
の武  
士で  
山城  
の國  
松波  
基宗  
の子  
であ  
つた。  
新九  
郎も  
、北

出た家、後還俗して松波庄五郎と名乗り、油商を営んで  
 りた。土岐氏の俗長井利隆の弟蓮、(南陽坊)は庄五郎で  
 が法蓮坊時代の友人であつた。絶へたので、其の井氏  
 に仕へたが、西村勘九郎と名を改めた。天文二年に利隆  
 をついで西村を継いで長井新九郎藤原規秀と改め、隆  
 たので七年に齊藤利良が病死し、何回か氏名を變へた  
 をし、天文七年に齊藤利政と改めた。何回か氏名を變へた  
 継いで七年に利政と改めた。何回か氏名を變へた  
 築齊藤利政は、大桑城に退いた。二  
 岐氏は、根拠地とし、織田信秀の所へ走らばし、美濃の  
 中年には、甲斐の武田氏へ走らばし、美濃の  
 中心部を全くと領してしまつた。岐氏を滅ぼし、同士の  
 義龍の不和に勢を占領してしまつた。其の末路も早く、養子の  
 龍部下のたにないつて、弘治二年四月長良川に戦つて、義  
 永蔵の十人、八月、後、の、葉山、織田信長に陥れられ、龍興は  
 伊勢に走り、後、の、葉山、織田信長に陥れられ、龍興は  
 びた。



らして稲葉山城に迫まらうとしたが、龍興信香の必死の防戦に破れて清洲に退いた。此の夏にも信長は美濃を侵した。失敗した。信長は幾度か西濃方面から稲葉山城を陥れようとしたが、常に失敗したので、今後は東濃方面から攻めやうとした。同年根拠地を清洲から小牧山に移し、後二年の間、或いは攻取つたが、その後追撃されて退廃して退いた。同九年八月信長は木曾川をはさんで、境川べりの龍興に對してゐたが大洪水に遭つたので退却した。信長の方針は亦一變し、九年九月木下藤吉郎に命じ、侯に有名な一夜城を築かせて守らせた。又間者を斉藤方に入れて、諸將の仲を悪くし、各自の方に誘ひ入れた。次で十年四月、將の仲を悪くし、各自の方に亂入した。又も龍興に妨げられ、退いた。然し東西両濃は既に信長の勢力下にあり、その上齊藤方の三人衆と云われた稲葉一鉄、氏家ト全、安藤守就を始め、多く部の將が信長に従つたので、信長は三河を攻めると宣傳した。おいて、十年八月一日、急に町屋に火を放つて攻め立てた。齊藤方は下つて十五日、先づ伊勢の長島に退いた。其の後、越前の朝倉氏に信長よつて反した。が再び失敗し、天正元年

## ② 信長と那

朝倉氏滅亡の時、近江の刀根山で戦死し、此処に齊藤氏は全く滅びた。信長は金色瓜紋の大旗を秋風に靡かせて、隊伍堂々と入場した。そして日頃尊信してゐた澤彦和尚の進言で、井ノ口と云つてゐた城下町を岐阜と改めた。加村、信長は稲葉山城を攻めるに当たつて、新加納の少林寺、西市場の法圓寺に火を放つた。此の両寺は当時七堂伽藍の立並ぶ大寺であつたが、黒煙もうもうとして上り火焰は天を焦がして物凄く、一夜にして灰と成り果てた。信長は更に手力雄神社をも一挙に焼き拂はうとした。放火に向つた雑兵どもが神社を取囲もや、不思議にもサツと風が吹いて来たかと思ふと、俄に朝霧がたちこめて目はくらみ、息は苦しくなり、手足に自由を失つてしまつた。流石の信長もどうすることもあるはず、神の御威力をかして、不敬の罪をわびた。盛になつた。以後信長は厚く手力雄神社を敬う様になつた。云うことである。信長は其の後もますます此の神社を尊敬し、何とかして誠心をささげようと思つた。或時各務野に立つて、北方の夕暮富士を指し「あれより西は手力雄神社に献じ、東は赤座につかはす」と云つて此の神社に奉納した土地が、今日の村有地各務野である。信長は之を家来の赤座七郎左右衛門政景に管理させ、信長は後西市場外七ヶ村のも左のになつたので、八ヶ村入會地と云う様になり徳川時





④ 春日局

⑤ 戸田氏鉄

⑥ 芭蕉の美

つて笠松の代官が治め、前野、野畑は尾州領、其の他は御料所又は室賀氏の知行となつた。後略、此の状、態は明治維新まで続き、その間各領各村毎に庄屋、此の年寄、百姓代等の村役人を置いて治めた。稲葉正成の妻であつた。将軍家光の幼時、其の乳母となつて一生懸命に家光を教育した。家光が後に立派な人物となつて、徳川幕府の基を築きました。固く守る事が出来た。局はその後、局の教育が良かつたか、賜つた。二位に叙せられた。春日局の名も此の時、天皇から賜つたものである。戸田氏鉄は元和三年に摂津の尼ヶ崎に五萬石を食んでゐた。が、大阪城改築の功によつて寛永十二年大垣城と附近の十萬石を頂いた。幕府は平定信と戸田氏鉄に同十四年島原に亂が起ると幕府は松平定信と戸田氏鉄に鎮定を命じた。氏鉄は一族以下三千の兵を引き、聯れ、定信と力を合せて平定した。家光はその功を賞し、正宗の名刀を與へた。俳句の名芭蕉は、諸国を巡つて名句を濃来遊有名人芭蕉は、諸国を巡つて名句を後世に残した。美濃にも前後、四回遊して名句を詠んだ。その間に來つて学ぶ人も多く、各務支考の如き門人も出た。

面白うてやがてかなしき鶉がひ哉  
城あとや古井の清水まづ訪はむ

⑦ 各務支考

山県郡山県村に生まれ、幼時父をなくしたので同村の大智寺の小僧になつた。十一歳の秋「色は葉に出で散りぬる紅葉かな」と詠んで世人を驚かした。後還俗して芭蕉の門人となり、芭蕉の死後、其の句風を後世に傳へるために「俳諧十論」等を著してゐる。

歌書よりも軍書に悲し吉野山  
牛叱る声に鳴立つ夕べかな

⑧ 林述齋

東濃岩村の藩主松平蘊の三男熊蔵は、幼時から学を好み、十七歳の頃は、もう平和漢の書で讀まないものも程であつた。偶々老中松平定信は、幕府の学政を改革せよと、跡継ぎと諸國に人材を求め、熊蔵を見出し、林述齋と号し、頭の跡継ぎと大學頭となつた。以後凡そ四十年間、学政は、勿論、大正四年従四位を賜つた。天保十二年七十四歳で没し、大正四年藩主の家に生まれ、幼時から文武に励み、一齋は岩村藩の家に生まれ、述齋とも、幼時から文武に励

⑨ 佐藤一齋

述齋ととも、幼時から文武に励

⑩ 田中大秀

齋が大学頭となつてからは儒官となつて述齋に仕へ、日夜共に学んだが、常に指定の禮を守つた。一齋は学徳高く其教へを受けた者は渡辺華山、佐久間象山を初め千人に及んだ。安政六年九月十八才で没し、大正四年従四位を賜つた。尚著書に言志録がある。

⑪ 赤穂義士

大垣藩 赤穂義士の藩主浅野長矩の母と大垣藩主戸田と大垣藩 赤穂義士の藩主浅野長矩の母と大垣藩主戸田氏定の母は、共に志摩の鳥羽城主内藤忠政の女で、従兄弟の間柄であつたから、赤穂の義士の仇討には戸田家で色々援助されたと云ふ。

⑫ 薩摩義士

西濃地方の川は土地が低い上に山地が迫つて豪雨の度に堤防が破れて住民は昔から幾十度となく洪水に苦しめられて来た。幕府は之を救はうとして、宝暦三年に木曾、長良、揖斐、即ち美濃三大川の下流の治水工事を九州薩摩の島津氏に命じた。藩主重年は家老平田正輔を総奉行に命じて此の工事を始めたが、治水の経験の少ない薩摩藩士には重荷であつた。其上時々洪水があつて、半分以上もできあがつた堤防が一夜の中に流れてしまつたこと、幾度かあつた。千辛万苦の末、同五年工事は終つたが、



⑰  
和

宮

の碑や古井戸は高農の地内にあつたが、学舎が建つ時此  
 所に移されたので、ある。⑱ 梁川星巖と紅蘭夫人が建つ  
 安八郡曾根の、学問が深く詩が巧みであつた。尊皇  
 の大義をわきまへ、頼山陽、藤田東湖、吉田松陰等と交  
 り、京都に居て大いに力を尊皇の事に尽くした。妻は紅蘭と云  
 にかかつて安政の大獄の三日前に没した。死後は紅蘭と云  
 つて、勤皇の志が厚く、常に夫を助け、其の死後は良く家  
 を守つた。天恩枯骨に達し、明治天皇は星巖に正四位を、  
 大正天皇は紅蘭に従五位を賜つた。  
 を解決するには朝廷の尊嚴をかりたり返して内外の國事  
 をないかと考へ、將軍家の茂の為に孝明天皇の御妹の御降嫁  
 が請ひたてまつた。天皇のお許に雄々しい御決心を遊た  
 め、公武合體の必要を感じ給うて、十月美濃の赤坂に御一  
 泊、翌日東下になつた。文久元年十月美濃の赤坂に御一  
 か、民家の紅葉を御賞覽遊ばされたので、近侍の者が船中  
 上げると、

おちて行く身を知りながら  
 もみぢ葉の人なつかしくこがれゆくかな

とお詠みになつた。宮は駅前中山道を御通りになつて、

# 明治時代

⑱ 山岡鐵太郎

⑲ 小原鉄心

其の夜は可児郡の御嵩におとまりになつた。郎は、飛驒二年勝安芳と共の江戸を兵火から救つた。郎は、弘化二年七月十日の江戸を飛驒代官となつた。て高山に移り、文武の道を学んだ。其の後、父に別れを江戸に出、千葉周作に剣道を。山岡静子がなかつた。んで、山岡家の養子となつた。嘉永年中、藩の改め、高の、山岡家の老小原鉄心は、嘉永年中、藩の改め、高島秋帆に、西洋式幕府の命で、京都を、大垣藩の改め、高又、維新の時、薩摩、津の命で、京都を、大垣藩の改め、高企、一職を退、い、津の命で、京都を、大垣藩の改め、高後、旗を立、て、錦旗に向は、うと藩は、朝廷への、東山軍の誓は、驚いて、佐幕の、主と藩士に、大義名文を、説き、朝廷への、東山軍の誓は、驚いて、佐征、総督江戸下向の時、は、藩兵を率ゐる、朝東山軍の誓は、驚いて、佐治、二功を、た、て、た、正五位男爵を、賜つた。朝政にあづかり、と、明



③ 明治天皇

戸長役場は前野濟縁寺に移され、同年七月市町村制によつて八ヶ村が合併して那加村となつた。村名は昔の那珂郷に因んで、時の郡長阿部直輔が命名した。役場は三十年十一月、今の小学校の運動場の西端に建てられたが、講堂が出来る時に校門前に移転新築された。

④ 板垣退助

三年には亘つて東濃各地を御巡視遊ばされた。又同十年の遭難には明治十五年時月板垣退助は、今の岐阜市丸山公園にあつた中教院で、自由党の大演説會と懇親會をやり、

⑤ 濃尾震災

と叫んで短刀で彼の胸を刺した。有名な「板垣死すとも自由は死せず」の語はその刹那に於ける彼の叫びであつた。時の愛知県病院院長後藤新平に手当を受け、大事に至らず大阪に向つた。公園の銅像と記念碑は今猶當時を思はせる。明治天皇が萬民をお慈しみになつたことは数限りないが、濃尾震災の時に濃尾の人民を御恵みになつた事は亦格別である。明治二十四年十月二十八日の未明に襲つた濃尾の大震災が天聴に達すると、天皇は直ちに救恤金三千圓を岐阜県へ賜り、北条侍従長に視察を命じなされた。侍従長の復命奏上によると被害が大きかつたので、再び罹災者をあはれみなされたと被害が一萬圓を賜ふと共に、



|      |     |     |
|------|-----|-----|
| 其他建物 | 半潰  | 計   |
| 全潰   | 四二六 | 六八六 |
| 半潰   | 一七五 |     |
|      | 一三九 |     |
| 計    | 三一四 |     |

戸数 七〇二 被害率 六七、〇〇

⑥ 津田天游

歳の頃より桐野の大野春道、厚見の三宅樅臺に好み、十二詩漢文を学んだ。明治十八年に家業の醫學の勉強に上京した。が間もなく、一醫となつて病を治せんよりは、道を講じて國の病を治するに如かずと志を變へ、其の後岐阜日日新聞社に入つて社會教化の筆を執つた。又詩が上手で、當時（大正）の美濃詩人の第一人者と讃へられてゐる。

手力雄社

蒼々老樹蔽垂義 例見端陽蹟柳儀  
 春服参差村廟下 一齋喝采彩龍馳

⑦ 下田歌子

歌子は安政三年恵那郡岩村藩士の家に生れた、小さい時から学を好み、十五歳の時出て宮内省に仕へた。其五華族手だつたので、皇后陛下から歌子の名を賜つた。其五華族

女学校の教授となり、欧米を視察し、又実践女学校同女子専門学校等、多くの学校を建て、女子教育に力を尽し、昭和十一年九月八十一歳で亡くなつた。

かかり火のきえてののちに出にけり

月はうかひをまた見さるらん 歌子

⑧ 日清戦争 日清戦争に本県から従軍した者は五千五百七十八人で、本村出身者は三十人である。此の役を忘れぬため手力雄神社の「前に記念碑が建てられてある。

⑨ 日露戦争 日露戦争に於ける本県の従軍者は一萬五千二百二十七人、本村出身者は百三十七人で、その中戦病没者は十六人である。三十九年三月十八日、我校庭で之等十六士の合同村葬が行はれた。講堂前の石碑は、此の役を記念する為に建てられたものである。

⑩ 廣瀬中佐 軍神廣瀬中佐は、九州大分県の人であるが、十歳の時父が高山の裁判所勤務となつたので共に移り、同地の小学校へ三年まで通つた。後父の転任に伴つて岐阜市美園町に移住、此処で小学校を終えた。中佐は正しく登校の時刻を守つたのである。町内の人は其の姿を見て時刻を知つたと云ふことである。又中佐は金華山が好きで時々登山したと云はれてゐる。

⑩ 林 紋平 土岐郡土岐村の人で、日露戦争の時、兵曹で三笠艦の

# 大正昭和時代

乗組であつた。第一回旅順閉塞隊員が募集され、熱誠は上官に通じ、選抜されて沈着勇敢な乗組員に差し出ると、誠無事に帰艦した。その沈着勇敢な乗組員は、みよるに採用する内規であつた。第二回の閉塞隊に許され、新志千代の丸に乗り込み、其の任務を遂げ、亦無事に帰艦した。全部を送つて忠孝両全、郷に残した老母と病身の弟に、給全部を

⑪ 韓国暴徒 朝鮮が併合されるまでは、時々暴徒起つたので、我が

が國では屢々其の鎮壓につとめた。明治四十年から、一年にかけて六十八聯隊が動した。本村から五人従軍した。

① 大正天皇東宮時代の行啓 大正天皇は明治三十一年十一月九日東宮の御時代に京都行啓の御帰路岐阜西別院に御泊翌十日

をた各もた近西日  
御°所兵°を別朝  
巡四へ營同御院沼  
視十行前日巡に津  
、三啓で歩視御に  
大年、御兵に假向  
垣参越迎六な泊は  
戸謀え送十りあせ  
田旅て申八、らら  
伯行十上連親せれ  
爵演八げ隊しらた  
邸習日たへくれ°  
にのの°行政、四  
数た朝翌啓治翌十  
日め福十のや十二  
御、井七折教六年  
滞三県日は育日九  
在度へに、をに月  
あ行御は本御は十  
ら啓出岐校下岐五  
せ、発阜の問阜日  
ら西遊、職遊市再  
れ濃ば大員ば及び  
た各さ垣児さび行  
°地の童れ付啓